

「日々の理科」(第1909号) 2019,-9,30

「チェキで”月”を撮る(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

「チェキ」というのは、かつて流行した「インスタントカメラ」の現代版である。本校の理科室で昨年度7台導入した。撮影後にすぐに現像されて、プリントを手にできるインスタントカメラといえば、ポラロイド社のものが代表格だろう。かつてのものは、完全に光学式で、シャッターを押したが最後、ピンボケ写真だろうが、構図が悪かろうが、かならずプリントされてしまい、ずいぶんフィルムを無駄にした。



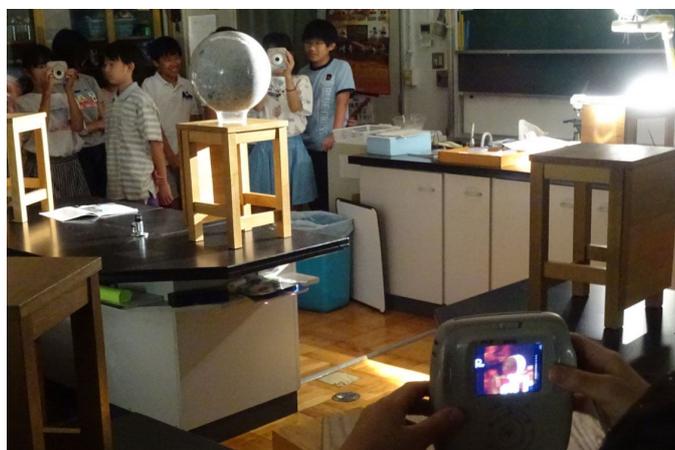
その点、この「チェキ」はかなり進化している。基本的にはデジタルカメラで、内蔵メモリやSDカードに撮影データを保存できる。写真は、塩化アンモニウムの再結晶を子どもが撮影しているところである。



本校にある「デジタル・チェキ」では、たくさん撮った写真の中から、必要なコマだけを選んでプリントできる。「プリンター付きのデジカメ」と考えても良い、便利な機能である。



そのチェキを使って、「月の撮影会」を開催した。「月の撮影会」といっても、被写体は月球儀である。理科室を暗くして、中央に月球儀を置き、OHPの光を当てたものである。



目視の場合と同じで、カメラを置く(構える)位置によって、さまざまな形の月を撮影できる。もしプリント機能が無かつとしても、これだけでも月を撮影している気分にはなれる。



写真は、少し遠くから月球儀を見たところ。太陽(OHP) - 月(月球儀) - カメラ(地球)の位置関係が150°程度の場合、三日月型に見えるわかる。実際は、もっと月に寄って撮ったほうが大きく写る。